

西田哲学成立過程におけるカント哲学の位置

三井善止

位置を占めているかを究明していきたい。

一

カント哲学の現代的意義の再検討は、哲学不在ともいわれる今日の科学時代において当然のことではあるが、それとともに、近代日本の哲学において唯一の独創的世界的哲学といわれる西田哲学の現代的意義が問い直されていることも意義深い事実である。両哲学は思想的な立場の上で対立的特徴を示しているにもかかわらず、それと同時にまた、きわめて親密な関わりを有している。それ故、両哲学の思想的特徴はかかる対立的関係にある思想を比較検討することによって明らかになるであらうし、そこからまた両哲学の現代的意義も明確になるものと思われる。

本論文はこのような意味でのカント哲学および西田哲学の現代的意義を解明するための予備的研究である。ここでは、歴史的な意味では当然のことであるが、西田哲学の側からカント哲学との関わりを取り上げ、それが西田哲学の成立過程においていかなる

周知の如く、西田哲学は西洋哲学の受容を越え、それとの対決を通して、これを克服する独自の哲学的立場を形成したといわれている。西田がかかる独自の哲学的立場を形成するに至った背景には、西洋哲学克服の原動力ともいえるべき彼の独自の体験としての禅体験が大きく働いているというべきであり、これによって西洋哲学の克服は可能となったといわなければならない。この禅体験を原動力とする西洋哲学の超克は哲学の上において禅体験の論理化といった様相をとるといえることができる。従って、西田にあって西洋哲学は一方で禅体験の論理化のための論理を有する哲学の範型であり、また同時に、徹底した批判的対決を通して、それ

を包み越える自らの哲学的立場の形成を可能とするものに他ならない。しかし、無論、全ての西洋哲学が西田哲学にとってかかる意味をもつものではなく、また、その西田哲学に対する関係も一通のものではない。簡単に言えば、西洋哲学は西田にとって親近的關係にあるものと、対決的關係にあるものとに分けられるが、前者は汎神論的・宗教的・形而上学的・体系的哲学の傾向をもち、弁証法的論理構造において考察される。その結果、科学的・非形而上学的・非体系的哲学を否定し、分析的・悟性的論理構造を拒否するのである。しかし、かかる否定および拒否は西田においては抹殺的否定あるいは拒絶ではなく、自らの立場の内に対決的に後者の立場を包括することを意味するのである。

以上のような西洋哲学に対する西田の哲学的態度において、専らその対決的姿勢が示されるのはカント哲学に関するものであるといえる。即ち、西田哲学の形成過程においてカント哲学はきわめて重要な役割を果たしているということが出来る。なぜなら、西田にとってカント哲学は他の哲学とは違った位置にあるからである。つまり一つは西田自身、カント哲学をその内へと包括することによってはじめて自らの哲学的体系を構築することができることとみなしていた点である。いま一つは西田のカント哲学理解は新カント学派によって大きく制約された面を当初多分にもっていたという点である。第一点はカント哲学を批判的に克服することが意図されており、この点において西田はカント哲学に対しては否

定的・対決的に関係し、カント哲学を弁証法的に克服する作業のうち自らの哲学の完成の重要な部分があることを自覚していたのである。それ故、西田はまさにヴィンデルバントが「カントを理解することはカントを超越することである」と述べた如く、カントを超越することによって自らの哲学を形成したといえる。第二点に関して言えば、その反面、西田のカント哲学理解は特に彼の哲学の形成の初期の段階においては新カント学派のカント理解を媒介としたものとみられる点が多く、その理解に限定されたカント哲学が西田にとって支配的であったと思われる。しかし、西田哲学形成の完成期に近づくにつれ、彼のカント哲学理解は新カント学派の制約を離れ、彼自身によるカント哲学理解あるいはカント哲学との対決がなされることになったと思われる。

西田哲学が形成されるに至る過程においてカント哲学がどのように取り上げられていたかについて、我々は西田哲学の確立に至る時期の変遷に沿って考えていかねばならない。西田哲学の形成に関する時代区分については諸説もあり、議論の余地も大いにあるが、ここでは特に西田が昭和十一年十一月に『善の研究』の「版を新たにするに当って」において述べていることに基づいて、それぞれの時期における西田のカント哲学理解を明らかにしていくことにする。

西田哲学は五つの立場に基づいて五期に分けられる。即ち、純粋経験の立場の第一期、自覚の立場の第二期、場所の立場の第三

期、弁証法的な一般者の立場の第四期、そして歴史的世界の立場の第五期である。このように西田哲学は五段階の発展過程においてその内部における自己批判的自覚契機を通してその眞の哲学形態を確立および展開するに至るのである。西田哲学の以上の形成過程を内容的に特徴づけるならば、第一期から第三期までは「自己から世界を見る立場」の自覚的な徹底深化の立場であり、第三期において西田哲学は形成されたとみることができ、これに対して、第四期、第五期はそれまでの立場の具体化の作業の段階とみられ、「世界から自己を見る立場」ということができる。従って、西田は場所の立場に立つことによって自身の哲学の究極の立場を明らかにすることができたのであり、この意味では、この立場に至る段階において西洋哲学の受容および対決・克服といった面が極めて強く、我々がカント哲学に対する西田の態度と理解を明らかにするという課題を解決するにはこの三期における西田哲学とカント哲学の関わりを段階的に究明していくことが重要であると思われる。

二

第一期の純粋経験の立場を示す著作および論文は『善の研究』および「認識論に於ける純論理派の主張に就て」(以下「純論理派」)である。『善の研究』ではカントの名はわずかに六箇所に見られるだけである。しかもこの中で西田がカント哲学を内容的に取り上

げているのは道德の問題に關してである。西田はこの書において純粋経験の立場を展開し、自らの哲学的立場をアピールしているが、いまだ彼の眞の立場は徹底されたものとはなっておらず、諸哲学思想との本来の対決は明確には行われていないといつてよい。それ故、当然カント哲学との関係もここでは素朴な段階であつて、カント哲学の深奥に入り込んだ議論はなされていない。しかし、『善の研究』出版と同じ明治四十四年に發表された「純論理派」において西田は彼自身のカント哲学および新カント学派の哲学思想についての理解を明らかにしている。この論文では西田は彼自身の哲学の内容に關する積極的な主張をほとんど行っていないが、この時期以降彼はカントおよび新カント学派の人びとの哲学に強い関心を抱きはじめ、中でもリッケルトの哲学に強く関わるようになる。

「純論理派」において西田は純論理派の立場と純粋経験の立場の二つの立場による認識論があるとし、純論理派の立場がいまだ徹底され尽していない独断的仮定を内に含んだものであるのに対して、この仮定を打ち破つたものが純粋経験の立場であると捉えている。ここで西田は純論理派の立場をリッケルトの主張を通して明らかにし、かつまたその思想の根元であるカントの認識論について言及している。西田のリッケルト理解は、一九一一年以前における著作および論文を通してものである²⁾。西田によれば、リッケルトは「認識作用とは當為の是認である³⁾」とし、當為は判断

の問題として価値の問題に他ならず、しかもかかる価値はすべて理論的価値であるとする。即ち、リッケルトは意味および価値に認識の客観性の基礎を求めたのである。そして西田はリッケルトが価値より出立しなければならぬという考え方は純粹経験の立場に近いものとみる。即ち、西田は「純粹経験は価値の世界である、意味とか価値といふのが経験の直接状態⁽⁴⁾であると考ええるのである。しかし、リッケルトが概念以前のものを不可解なるものとして、無意味であると説くことに対して、西田は「知情意未分以前経験の具体的体系を有するもの」の「理解以前の理解⁽⁵⁾」ということを認め、リッケルトの論理的理解を不徹底な独断的なものとして退ける。そして西田はリッケルトとカントの違いを次の点にみる。即ち、カントは超経験的ではあるが、なお自覚の統一といった事実を基礎としているのに対して、リッケルトは事実と真理を峻別して、真理はカテゴリーに従うことによってはじめて把握される、とする点である。

さらに、西田はカントの純粹統覚を純粹経験からみれば、一種の経験統一であり、「カントがすべての範疇の本であるからといって、統一の範疇から区別して純(粹)統覚を説いて居る」⁽⁶⁾点で純粹統覚は「反省することのできない、思维の対象とならない直接の活動的統一」である⁽⁷⁾とみている。従って、論理的要求においては事実と当為あるいは経験と思维を厳密に区別し、当為あるいは思维の立場に立つリッケルトを否定して、西田はそれを一層徹底

した立場として純粹経験の立場に近いものとしてカントの純粹統覚を捉えている。しかし、それにもかかわらず西田はカントの純粹統覚を純粹経験の世界に近いものとして、しかも、意味の世界に近いものとして理解しているが、この理解はまさにリッケルトのカント理解に準じたものといふことができる。というのも、リッケルトはカントの純粹(超越論的)統覚を「意味の概念⁽⁸⁾」として捉えているからである。この内容に関してリッケルトは次のように述べている。「近代に於ては、フィヒテやヘーゲルの試みた意味解明は主としてカントの超越論的統覚の考えを受け継いできている。彼らの形而上学はかかる意味概念に出発点を置いた結果、意味解釈は超越的實在の創造へと転化することになったのである」⁽⁹⁾と。リッケルトのこの言葉は西田のこれ以後の進むべき道をも暗示していたといふことができる。

三

第二期に当たる自覚の立場は「論理的理解と教理的理解」(一九二二)と、さらにこの論文を先駆とする『自覚に於ける直観と反省』(前半は「藝文」に、後半は「哲学研究」に一九二三年から一九二七年にわたって連載された)において成立する。西田によれば、この著作が書かれた目的は「自覚的体系の形式に従ってすべての實在を考へ、之に依つて現今哲学の重要な問題と思はれる価値と存在、意味と事実との結合を説明⁽¹⁰⁾」することにあつた。そこで西

田はこの自覚の立場をフイヒテ的立場で新カント学派とベルグソンを結合することによって確立した。ベルグソンの立場は西田の純粹経験の立場に相応するものであつて、ベルグソンの純粹持続の考えを取り入れた不斷進行の意識としての直観の事実に他ならず、西田によれば、これは価値の世界であり意味の世界であつた。しかしこの立場ではその内部の構造は明らかとなつてはいないと西田は考え、純粹経験の不備を補うために一層その根源へと遡り、あらゆる対立がそこにおいて結合する最も具体的な實在を絶対的自由の意志の自覚として捉えたのであるが、それはリッケルトの価値の世界が存在の世界と同一であることを明らかにすると共に、コーヘンの「極限概念」によつてリッケルトの立場を包越し、フイヒテの立場に立つことによつて可能であつた。そしてこの思想内容の展開は新カント学派の思想の徹底という作業によつて行われたという点で、西田がフイヒテの立場に立つことになるのは極めて当然のことであつたといつてよいであらう。即ち、マールブルク学派を代表するコーヘンはカント哲学におけるアプリアオリズムの方向へと純化し、さらにヘーゲルの論理主義へと移行し、リッケルトの哲学はフイヒテの主意主義へと至るからである。また西田の新カント学派との対決は、その思想成立の源であるカント哲学との密接な関わりを否定することはできず、カント哲学との対決を余儀なくしたのである。

西田は『自覚に於ける直観と反省』の「跋」において「此書に

於て述べた考をカント哲学との關係に於て簡単にまとめて」論じている。ここにおいて西田はカント哲学の真理認識、物自体の考えが新カント学派によつて洗練されたと考えている。即ち、リッケルトが認識の対象を當為とか価値と考へたこと、新カント学徒たちが物自体を概念的知識以前に与えられた直接経験の如きものと考へている点である。そして認識論上眞の主観といふべきものは一つの客観界を構成する統一作用であつて、カントの純粹自我統一に他ならない。その結果、西田はカントの物自体を絶対自由の意志と考へ、この物自体の世界は絶対意志の直接の対象、即ち、芸術の世界、宗教の世界と考へたのである。

四

さて、西田は自覚の立場がいまだ觀念論的あるいは主観主義的な枠組を超えておらず、彼の求める眞の具体的實在に達していないとして、絶対的自由の意志そのものの成立する基盤へと考察を向けるのである。この立場は自覚の深化であつて自覚そのものの發展といつてよい立場である。彼は「対象と対象とが互に關係し、一体系を成して、自己自身を維持すると云ふには、かかる体系自身を維持するものが考へられねばならぬと共に、かかる体系をその中に成立せしめ、かかる体系がそれと於てであると云ふべきものが考へられねばならぬ」といふ立場に立つて、この「その中に成立せしめるもの」をプラトンの『ティマイオス』の語に依り

て「場所」¹³と名づけたのである。西田はプラトン、アリストテレスからの示唆によって、また、フッサールの「意識一般の野」¹⁴の考えを克服することによって、主観主義、主意主義を超える直観主義的なもの（あるいは実在主義的なもの）への移行を通して場所の立場へと至ったのである。かかる立場においては、新カント学派の思想は彼の中で乗り越えられたとみることが出来る。しかもこの立場においてカントと新カント学派との区別が西田の中で明確になってきたように思われる。西田は「場所」を三つの層をもつものとしてあらわしている。第一は有の場所であり、第二は対立的無の場所であり、第三は真の無の場所である。第一の有の場所は物質あるいは物質的な力の見られる空間であり、第二の対立的無の場所はいわゆる意識一般の野である。第三の無の場所は物を映す「意識一般の野」を包む場所として本来の場所といえる。西田は「カント学派では認識対象界に対して主観的に超越的主観即ち意識一般といふ如きものが考へられる」¹⁵といひ、我々の意識の世界はこの意識一般としての領野に包まれることにおいて成立すると考へるのである。即ち、西田は対立的無の場所では、意識作用としての判断者即ち判断作用というものが考へられるのであり、この場所も一種の有として作用の基体に他ならない。それ故、西田はこの対立的無の場所はさらに真の無の場所よりみられたとき、作用ではなく、単に妥当なものが見られるのみであると考へる。即ち、「カントの意識一般もすべての認識の構成的主

観としては、真の無の場所ではなければならぬ。此場所に於ては、すべて『於てあるもの』は妥当するものである。是に於て、すべて存在の有は變じて譬辭的有とならねばならぬ。併し意識一般も尚真の無の立場ではない。対立的無の立場から絶対的無の立場への入口に過ぎない。従つて、「カントが感覚によって知識の内容を受け取ると考へた意識は、対立的無の場所ではなければならぬ、単に映す鏡でなければならぬ、かかる場所に於て感覚の世界がある」¹⁷しかし、意識一般はこのような意識ではなく、この意識の於てある場所に他ならない。対立的無から真の無の場所へ移る時、カントの意識一般は成り立つので、ここではじめてすべてが認識対象となる。それ故、「真実在は認識対象の形を潜めて、不可知的な物自体となる」¹⁸しかし、物自体は除去することのできない質料である。かかる物自体と同様に意識一般は判断の主観でありながら、判断作用を超越したものでなければならず、それ故、真の意識はフイヒテの事行の如く、その背後に意志の意義をもつものでなければならぬ。従つて、真の無の場所に於てあるものは叙知的存在であり、かかる場所は叙智的存在の場所なのである。西田はかかる場所の立場における新カント学派およびカント哲学との關係を、「左右田博士に答ふ」の論文において明確に打ち出している。この論文は左右田喜一郎の「西田哲学の方法に就て」西田博士の教えを乞ふ¹⁹に答えて書かれたものである。左右田は、西田が発表した「働くもの」および「場所」を読み、これに

対する質疑として発表したものであるが、この論文において左右田が西田の学説を「西田哲学」と称し、その体系の獨創性と完成を評価したのであるが、「純然たる学問上の立場から西田哲学の確立は学問上一個の思想逆転にすぎぬと確信する⁽²⁰⁾」として、五点の疑問を提出した。(一)何故知識に対して意志の上位を認めるのか。(二)場所を以って何故「無」とするのか。(三)相対的無の立場を越えて真の無の場所を考えることができるならば、何故「真のまた真の無」の場所を考え得ぬか。(四)真の場所の中で意志と直観とはどのような位置関係にあるのか。(五)西田哲学は理論理性の僭越を犯し独断的形而上学に陥っているのではないか。

以上の五点において、左右田は強固な新カント学派（西南学派）の学徒として、西田の哲学的方法論は形而上学に墮するものであると厳しく批判した。特に、(一)(二)の点を通して左右田は次のように述べている。「総じて西田哲学に余が不満足を感じるのは、消極的に限界を劃するのみなる批判哲学の境地にいつも積極的な属性を考へらるる事である。……此の上に積極的の限定を得て此れに導かれて消極的の限界を説くことは便利でもあり、……夫ならば宗教上の神や認識論上の物自体を説くものに比して、現在の学問の発達、知識の程度に応じて唯だ手際がよいといふの差あるだけである⁽²¹⁾。左右田が単に消極的な限界を積極的なものに変えていく西田の手法に対して、疑義を申し立てるのはまさに新カント学徒としての面目躍如たるものがあるが、第五点の独断的形而上

学への墮落とする批判を中心として、これらの批判は西田哲学の根本的立場を問うとともに、新カント学派およびカント哲学に対する西田の立場を明確にする。西田は「左右田博士に答ふ」において、左右田の疑問に直接的に答える形式はとらず、「博士の批評の由って起る根底と思はれるものに対して」考えを述べるといふ答え方をしている。即ち、西田は特にリッケルトを批判し、さらにそこからカント哲学へと論及している。西田はこの論文において、まず「知るといふこと」と「知ることを知るといふこと⁽²²⁾」との区別を明確にすることを強調し、この区別が明らかでなければ自家撞着に陥ると説いている。そして、知ることを知ることがまさに自覚であつて、この自覚的方向に意識一般の立場、真の無の場所たる直覚的自覚が成立し、この中間に意志的自覚が成り立つ。「カントの意識一般は「認識作用其者の内に反省して行くこと」の意味に於て自覚の純化したものであり⁽²³⁾」、「私が作用の作用として自覚的と考へるものである⁽²⁴⁾」と述べ、カントに於ては作用の作用という作用の自覚がなされており、真の自己同一として自覚の立場に立つものであるとみなしている。そして西田はカントの構成的客観としての純粹統覚が単に論理的客観ではなく、内容と形式を結合する知覚と思维との綜合的客観と捉え、リッケルトなどの西南学派がこの点を深く顧慮しておらず、かかる客観を単に判断的主観に限定していることに対して、そうであるならば、カントのコペルニクス的転回の意義は失われてしまうと論じてい

る。西田はカントが「形式と内容との統一を知的自覚に求めた」ことについて「カント哲学の真髓は此にある」として、「私はカントの此立場に立って深く自覚の主観の意義を考へて見たい」と言っている。つまり、カントにおける認識主観は西田の場所でもあり、また真の無の場所への転換点であり、この意味で西田は積極的にカント哲学における自覚の方向を評価する。しかし一方でカント哲学の徹底でもあるリッケルトに対してはこの場所の立場に立って明確に拒否する態度をとっている。即ち、「リッケルトの判断意識といふのは、先づ主客の対立を考へ、知るといふことを作用と考へる心理学的見方を基としたものである。而してその認識主観といふのは、カントの認識主観から所与の原理を除去して、単に形式的に考へられたものである。」⁽²⁶⁾それ故、西田は「カントの認識主観については、リッケルトの如き考に反して、むしろカント自身の考を維持したいと思ふ」と表明している。このように西田は自覚の立場において当初リッケルト的思考のもとで考へており、またカントの純粹統覚についての解釈もリッケルト的理解のもとにあったと言ふことができるが、自覚の立場の徹底あるいはその発展的克服の立場としての場所の立場においては、かかる態度およびカント理解を捨てて、リッケルトとカントを明確に峻別し、カント自身の意味を深めるという態度をとっている。即ち、西田は新カント学派のカントを破棄したのであるが、これによって果たしてカントそのものの理解がなされたかどうかはこ

こではまだ断定されえない。即ち、西田はカントを新カント学派（主として西南学派リッケルト）から解釈することによって、逆にコーヘンとともにフィヒテ以降のドイツ観念論によるカント理解へと身を近づけているということが出来るからである。ここで、西田の哲学的発展とともに、カントの理解も西田哲学の中で発展し、推移しているということができよう。この点で西田のドイツ観念論との関係のもとで、西田のカント理解も明らかとなるであろうし、ドイツ観念論に対して西田がとった態度およびそれに対する問題提示との関係において、西田のカント理解への問題点も明確になってくるであろう。

- (1) 西田幾多郎全集 第七卷 二〇三頁。
- (2) H. Cohen: Der Gegenstand der Erkenntnis. 1. Aufl. 1892, 2. Aufl. 1904.
Zwei Wege der Erkenntnistheorie. 1909.
Das Eine, die Einheit und die Eins. 1911.
- (3) 西田幾多郎全集 第一卷 二一八頁。
- (4) 同書 二三〇頁。
- (5) 同書 二三二頁。
- (6) 同書 二三三頁。
- (7) 同書 二三三頁。
- (8) H. Rickert: Vom Begriff der Philosophie. 1910. S.31.
- (9) Ibid., S.31.
- (10) 西田幾多郎全集 第二卷 三頁。
- (11) 同書 三三七頁。

- (12) 西田幾多郎全集、第四卷、二〇八頁。
- (13) 同書、二〇九頁。
- (14) E. Husserl: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phä-
nomenologischen Philosophie. (Husserliana Bd. III-1) S.106.
- (15) 西田幾多郎全集、第四卷、二二一頁。
- (16) 同書、二二二頁。
- (17) 同書、二二三頁。
- (18) 同書、二二四頁。
- (19) 「哲学研究」(第二七号)
- (20) 同書、三頁。
- (21) 同書、一四頁。
- (22) 西田幾多郎全集、第四卷、二九三頁。
- (23) 同書、二九七頁。
- (24) 同書、三〇三頁。
- (25) 同書、三〇五頁。
- (26) 同書、三〇五頁。
- (27) 同書、三〇五頁。
- (28) 同書、三〇五頁。
- (29) 同書、三〇五頁。

(みづい・ぜんじ、哲学・教育哲学、玉川大学教授)